

「デジタル資料と学術の未来」の 特集にあたって

編集部

世界のすべてがデジタル化されつつある。

ここに言う「デジタル」とは、「アナログ」との対比における「デジタル」とどまらず、電子化、すなわちコンピュータでの処理という性質を強く持つ。本特集は、紙媒体の文献データがコンピュータでの利用に供されるようになってきた現状を踏まえている。

ここで人間とメディアの歴史を少し振り返ってみよう。

人間はコトバを得て思考を始めた。次に文字を得て思考を記録し始めた。ここに歴史が始まった。しかし人はまだ文字にコミュニケーションを求めてはいなかった。甲骨文字は、書き手と読み手が重なっていたと思われるからである。金文は子孫など特定少数者へのメッセージを載せるのに対し、碑文は不特定多数へのメッセージを載せる。簡牘もしかり。ここに至って文字はようやくコミュニケーションの手段となった。しかし文字にかかわる人間はまだ少なく、王と官僚が文字を握り、世界を動かす。すなわち古代である。紙の発明によって文字にかかわる人間が増える。貴族の時代、中世である。印刷によって庶民も文字に関わると近世となり、新聞によって情報が同時的に共有されると、これが近代となる。そして最後にインターネットによってすべての人間に情報発信が許される時代、これが当代である。すなわちメディアの変化が世界の歴史を変えてきた。少なくともメディアと歴史区分は連動している。この認識に立てば、現在進みつつある情報の保存と発信の電子化は、大きな時代の転換をもたらすであろう。このような状況にあって、学術は情報のデジタル化と電子化にどう向き合うべきであろうか。それを考えることが本特集の趣旨である。

まずなさなければならないのは、学術界において情報の電子化がどのような形で、どこまで進んでいるか、あるいは進もうとしているかを確認することである。そして次に考えるべきは、電子化によって何が可能になるのか、あるいは何が失われるのかという問題である。言葉を変えれば、電子化によって齎されるモノやコトを視野に入れつつ、過去の紙時代の文献研究の蓄積をどう引き継いでゆくかを考える必要があるということである。

関連論文の入手や稀見文献の閲覧は、電子化とリポジトリによって極めて容易になった。またテキスト計量分析によって文献の分析に新局面が開かれた。しかしいっぽうでかつての紙時代の校勘学ほどの精緻な思想と手順を持ったテキスト学は、現時点では電子情報に確立されていない。何が同字で何が異体字なのか、ユニコードに頼る限りでは議論さえできない。またテキストの電子化は多数の人間が手を付けているが、そこには統一的な理解が存在せず、重複入力もあり、字体処理の合意もない。このような状態をデジタル・スラム (digital slum) という。スラム回避の手段として、現在主流なのは、書籍紙面の画像としての電子化である。しかしこれでは、電子化の持つ潜在的な可能性が十分には発揮されない。紙の代わりに電子画像で文献は入手できても、テキスト計量分析は適用できないがゆえである。そしていったん電子画像化されてしまうと、伝統的書誌学が利用していた紙質や刷りの先後、補版、墨色などのデータが失われてしまう。スラム状態を、秩序世界としてのコスモスへ、すなわちデジタル・コスモスにするにはどうすればよいのか。いかなるコスモスが望まれ、技術的に可能であるのか、まだ議論が十分でないように思われる。経書の注疏を考えてみても、現在のテキスト処理技術では、経・注・疏の対応関係を保持しつつ、経・注・疏それぞれの体系を明示することはむづかしい。これに音義や校勘記を含めて「定本」を作ることは、紙の時代には可能であったのに、電子テキストでは今のところ困難である。

さらに考えるべきことは単独の文献のレベルにはとどまらない。そもそも誰が大規模電子化を行い、保存・提示すべきなのか。世界の電子化をコントロールすべきなのか、するとすれば誰がどのようになすべきか。これは学界のみならず、図書館、出版などの世界へも広がる問題である。

もちろん、大規模電子化のもたらす可能性、変化を考えることも必要である。作り上げられた巨大データが、教育研究手法にどのようなインパクトを与え、何が可能になるか、こちらは期待を以って考えを進めてゆかなければならない。

過去の研究蓄積をどのように引き継ぎつつ、何を可能にすべくどこへ進むべきなのか、小特集ながら、本号で考えてゆきたいと思う。

冒頭に、文献のデジタル化を身近な問題として捉えられるよう座談会を置いた。続いて文献のデジタル化の現状を総括する論考を集めた。

内田慶市さんには、関西大学が推進している電子化事業 KU-ORCAS (ケーユーオルカス) について、その意図や進捗状況を語っていただいた。

宮川創さんには、欧州における図書デジタル化の現状と未来を語っていた。対象は中国に限定しない。というのも長い研究蓄積を持つ欧州のオリエンタリ研究がデジタル化に何を求め、何をなしているかということは、中国学研究にとって大きな示唆となるであろうからである。

下田正弘さんと王一凡さんには、中国が推進する書籍デジタル化の大プロジェクトである CADAL ならびに、日本でいち早く参加した東京大学の状況を紹介いただいた。

後半は大きく図書館に焦点を当てて論考を並べた。文献大規模電子化の持つ可能性とそれを視野に入れたさまざまな動き、そして研究手法の変化などさまざまな点から学術へ与える変化を考えた。

入江伸さんは、図書館に所属しながら書籍の電子化を広い視野のもとで極めて積極的に進めてこられた。その立場から「図書館の未来」について語っていただいた。日本の図書館界の最先端の思考を知ることができるであろう。

福林靖博さんには、国会図書館の文献電子化の蓄積と将来構想について語っていただいた。国会図書館は所蔵図書を大量に電子化し、デジタルアーカイブとして公開している。日本唯一の立場と機能を生かした活動として、誠に有益な活動をしている。その国会図書館は、今後どこへ向かおうとしているのだろうか。

齊藤正高さん、楊曉捷さんには、デジタル資料の学術活用を語っていただいた。電子情報を提供する側ではなく、利用者の立場から電子化という新しい状況を学術活動にどのように利用することができるのかは、研究者として最も興味深いところである。

さらに [天南地北] のエッセイとして最後に、加藤好郎さんに、図書館学の立場から、広く時代相を見渡していただいた。表現を変えれば、紙の書籍を所蔵するリアル図書館と電子化された文献情報を運用・提供する仮想図書館の対比となる。対立か協働か、両者の関係はどうあるべきであろうか。(木島史雄)